

令和6年8月1日

関係機関・団体の長 様

新潟県病虫害防除所長

新潟県病虫害発生予察情報・予報第6号の送付について

このことについて、別添のとおり発表しましたので、送付します。

なお、この情報は、「新潟県病虫害防除所」のホームページでも閲覧できますので、適宜御活用ください。

また、次回の予報第7号（9月の発生予想）の発表日は、9月2日を予定しています。

新潟県病虫害防除所業務課

電話：0258-35-0867

FAX：0258-35-7445

<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/>

令和6年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第6号
(8月の発生予想)

令和6年8月1日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】

穂いもち	量：やや少 程度：少発生 (発病度1~20)	① 7月下旬の葉いもち発生量は平年比やや少なく、穂いもち伝染源として重要な上位葉の病斑は少ない。 (±~-) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。(一)
【防除上の留意事項】 ① ほ場の葉いもち発生状況を確認し、発生程度に応じた防除対応を行う。特に新之助や多肥栽培および転作跡での発生に注意する。 ② 粉・液剤による防除の散布適期は、1回散布では出穂期、2回散布では出穂期直前と穂揃い期である。粒剤は薬剤により散布時期が異なるため、最新の「防除指針」を参照し適期に施用する。		
紋枯病	量：並 程度：少発生 (発病度1~20)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(一) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。(±~+)
稲こうじ病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病株率1~5)	① 前年の発生量は平年比やや少なく、伝染源量は平年比やや少ないと推測される。(一) ② コシヒカリの幼穂形成期以降の降雨日数は平年並~やや多い。(±~+) ③ 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。(一)
【防除上の留意事項】 ① 発病が確認されたほ場は無発病ほ場と別に収穫し、乾燥・調製も別々に行う。 ② 粗選機を使用して発病粒を除去し、玄米への混入を防ぐ。特にインペラ式粃すり機は発病粒の混入が多い粃には適さないため、必ず粗選機を併用する。 ③ 調製時には、被害を助長する「肌ずれ」を防止するとともに、流量を調節して丁寧に粃すり・選別を行う。		
ニカメイチュウ	量：並 程度：少発生 (被害株率1~29%) 時期：やや早い (第1世代発蛾最盛期 7月第6半旬頃)	① 7月下旬の被害量は平年並。(±) ② 第1世代幼虫の発生時期は平年比やや早い。 ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
セジロウンカ	量：多い 程度：少発生 (株当たり最高寄生数 1~25頭)	① 7月下旬の水田内すくい取り虫数は平年比多い。(+) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稲】 つづき

ツマグロヨコバイ	量：多い 程度：少発生 (株当たり最高寄生数： 1～10頭)	① 7月下旬の水田内すくい取り調査では平年比やや多い。(+) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
斑点米カメムシ類	量：多い 時期：やや早い	① 7月下旬の畦畔雑草地での確認地点率は平年に比べアカスジカスミカメが高く(+)、アカヒゲホソミドリカスミカメが並(±)、オオトゲシラホシカメムシがやや低い(-)。 ② コシヒカリの出穂期は平年より3日程度早まる見込み。 ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
【防除上の留意事項】 7月10日発表の注意報第2号(カメムシ類による斑点米の多発生に注意)を参照する。		
イネツトムシ	量：並 程度：少発生 (被害株率1～30%)	① 7月下旬の被害量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
イネアオムシ (フタオビコヤガ)	量：並 程度：少発生 (株当たり最高寄生数 1～10頭)	① 7月下旬の幼虫発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～-)
コブノメイガ	量：並	① 7月下旬の被害発生は平年並。(±) ② フェロモントラップの誘殺数は平年並み。(±)
コバネイナゴ	量：並 程度：少発生 (寄生数1～10頭)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)

【大豆】

紫斑病	量：並	① 前年の紫斑粒の発生は平年並で、伝染源量は平年並と推測される。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～-)
フタスジヒメハムシ	量：少ない	① 7月下旬の第1世代成虫の発生量は、未確認で平年比やや少ない。(－)
アブラムシ類	量：やや少ない	① 7月下旬の発生量は未確認で平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～+)

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【大豆】つづき

<p>ハダニ類</p>	<p>量：並</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～＋)</p>
<p>ウコンノメイガ</p>	<p>量：やや少ない 時期：並</p>	<p>① 7月下旬の被害発生は平年比やや少ない。(－)</p>
<p>【防除上の留意事項】 前年多発生した地域や大豆の生育が旺盛な場合は、多発生しやすいので注意する。</p>		
<p>ツメクサガ等 食葉性鱗翅目幼虫</p>	<p>量：並</p>	<p>① 7月下旬の被害発生は平年並。(±)</p>
<p>マメシンクイガ</p>	<p>量：やや少ない</p>	<p>① 前年の発生量は平年比やや少なく、幼虫の越冬量は平年よりやや少ないと推測される。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(－)</p>
<p>【防除上の留意事項】 防除適期は8月第6半旬～9月第2半旬であるが、薬剤の種類により時期や回数に違いがあるので、最新の「防除指針」を参照する。</p>		
<p>カメムシ類</p>	<p>量：やや多い</p>	<p>① 予察灯等におけるクサギカメムシの誘殺数はほぼ平年並。(±) ② 暖冬であったことから成虫の越冬量は多かったと推測される。(＋) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>

【なし】

<p>黒斑病</p>	<p>量：並 程度：少発生 (発病葉率1～5%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)</p>
<p>黒星病</p>	<p>量：やや少ない 程度：少発生 (発病葉率1～5%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並か少ない(±～－)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 発病葉、発病果は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し適切に処分する。 ② 徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。また、薬液のかかりにくい園地の周縁部は補正散布を行う。 ③ 気象予報に留意し、降雨前散布を励行するとともに、かけむらのないよう丁寧に散布する。 ④ 耐性菌の発生を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる剤をローテーション使用する。 ⑤ 薬剤防除の際には、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。 ⑥ 翌年に伝染源を持ち越さないように、秋期防除及び休眠期の落葉処理を実施する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】 つづき

褐色斑点病 (西洋なし)	量：多い 程度：中発生 (発病葉率6~15%)	① 7月下旬の発生量は平年比多い。(+) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±~-)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 発病葉、発病果、発病枝はせん除し、園地外に持ち出し適切に処分する。</p> <p>② 徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。また、二次伸長枝は発病しやすいので、せん除し園地外に持ち出し適切に処分する。</p> <p>③ 気象予報に留意し、降雨前散布を励行するとともに、かけむらのないよう丁寧に散布する。また、薬液のかかりにくい園地の周縁部は補正散布を行う。</p> <p>④ 耐性菌の発生を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる剤をローテーション使用する。</p>		
ナシヒメシクイ	量：やや多い 程度：少発生 (被害果率1~2%)	① 7月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② フェロモントラップの第2世代成虫の誘殺数は平年比多い。(+) ③ 有袋栽培等の物理的防除の実施率が高い。(-) ④ 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少ない(±~+)と予想されている。
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 被害果は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出して適切に処分する。</p> <p>② 例年発生のみられる園地では、幼虫発生期である7月下旬~8月上旬、8月中下旬の防除を徹底する。なお、防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。</p> <p>③ 果実被害は収穫期が遅いものほど多くなる傾向があるので、中生~晩生品種(豊水、新高など)は特に注意する。</p>		
モモシクイガ	量：並	① 7月下旬までの被害果の発生は未確認で平年並。(±) ② 7月下旬までのフェロモントラップの誘殺数は平年並~やや少ない。(±~-) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
ハマキムシ類	量：並 程度：少発生 (被害葉率1~15%) 時期：早い (第2世代成虫の発蛾盛期は8月第3半旬)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② リンゴコカクモンハマキの第1世代成虫の誘殺数は平年比やや少ないが、中越地域の一部で平年比多い。(一~±) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>第3世代幼虫の防除時期は、前世代成虫誘殺盛期の10日後である。</p>		

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】 つづき

<p>果樹カメムシ類</p>	<p>量：多い</p>	<p>① 7月下旬の被害果は未確認で平年並。(±) ② フェロモントラップの誘殺数は平年比多く、予察灯の誘殺数もやや多い～多い地点がみられる。(+) ③ 有袋栽培等の物理的防除実施率が高い。(－) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>
<p>【防除上の留意事項】 8月1日発表の注意報第3号（果樹カメムシ類の多発生に注意）を参照する。</p>		
<p>ハダニ類</p>	<p>量：並 程度：少発生 (寄生葉率1～15%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少ない(±～+)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。 ② ハダニ類は、薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一殺ダニ剤の使用は原則として年1回とし、作用機構の異なる薬剤をローテーション使用する。 ③ 収穫時期が近い品種については、農薬の使用時期（収穫前日数）に注意する。</p>		

【もも】

<p>せん孔細菌病</p>	<p>量：並 葉の発生程度：中発生 (発病葉率11～30%) 果実の発生程度：少発生 (発病果率1～5%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 新梢に発生する夏型枝病斑や発病果は放置せず、見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し適切に処分する。 ② 次年度の伝染源密度低減を図るため、収穫後は速やかに無機銅剤を2週間おきに感染確率の高い10月中旬まで2～3回散布する。</p>		
<p>灰星病</p>	<p>量：並 程度：少発生 (発病果率1～5%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～+)</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 発病果及び腐敗果実は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し適切に処分する。 ② 品種により収穫期が異なるので、薬剤防除にあたっては隣接園地への飛散に十分注意するとともに、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【もも】つづき

モモハモグリガ	量：やや少ない 程度：少発生 (被害葉率 1～15%)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 7月下旬までのフェロモントラップの誘殺数は平年比やや少ない～並。(－～±) ③ 向こう 1 か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
ナシヒメシクイ	量：やや多い 程度：少発生 (被害果率 1～2%)	① 7月下旬の被害新梢の発生量は平年比やや多い。(＋) ② 7月下旬の被害果の発生量は平年並。(±) ③ フェロモントラップの第2世代成虫の誘殺数は平年比多い。(＋) ④ 向こう 1 か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年並か少ない(±～＋)と予想されている。
【防除上の留意事項】 ① 被害果は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し適切に処分する。 ② 新梢の芯折れは見つけ次第せん除し、適切に処分する。		
モモシクイガ	量：並	① 7月下旬までの被害果の発生は未確認で平年並。(±) ② 7月下旬までのフェロモントラップでの誘殺数は平年並～やや少ない。(±～－) ③ 向こう 1 か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
ハダニ類	量：やや多い 程度：少発生 (寄生葉率 1～15%)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう 1 か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年並か少ない(±～＋)と予想されている。
【防除上の留意事項】 ① 激しく加害されると早期落葉するため、発生状況に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。 ② 薬剤防除にあたっては、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。		

【ぶどう】

晩腐病	量：並 程度：少発生 (発病果房率 1～10%)	① 7月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう 1 か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)
【防除上の留意事項】 発病粒は見つけ次第せん除し、園外に持ち出し適切に処分する。		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【ぶどう】つづき

べと病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病葉率1~10%)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並か少ない(±～－)と予想されている。
	【防除上の留意事項】 ① 発病した葉や果粒は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し適切に処分する。 ② デラウェアは収穫終了後に葉の健全性維持のため防除を必ず行う。大粒種では9月以降も発生が増加するので、予防散布に努める。	
褐斑病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~10%)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)
ベスタロチアつる枯病	量：並	① 7月下旬現在まで、発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)
フタテンヒメヨコバイ	量：並	① 7月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【かき】

すす点病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~5%)	① 7月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)
チャノキイロアザミウマ	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~2%)	① 7月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
果樹カメムシ類	量：多い	① 7月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② フェロモントラップの誘殺数は平年比多く、予察灯の誘殺数もやや多い～多い地点がみられる。(＋) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
	【防除上の留意事項】 8月1日発表の注意報第3号(果樹カメムシ類の多発生に注意)を参照する。	

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【秋冬ねぎ】

さび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病度 1～5)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並か少ない(±～－)と予想されている。
黒斑病・葉枯病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病度 1～20)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予想されている。(±～－)
軟腐病	量：並 程度：少発生 (発病株率 1～5%)	① 7月下旬の発生量は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少ない(±～－)と予想されている。
ネギハモグリバエ	量：やや少ない 程度：少発生 (被害度 1～10)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
ネギアザミウマ	量：並 程度：中発生 (被害度 11～20)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ないが、多発生ほ場も認められた。(－～±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
【防除上の留意事項】 高温乾燥条件で密度が急増するので発生状況に注意し、発生が多いほ場では、定期的に防除を行い、密度抑制に努める。		
ネギコガ	量：並 程度：少発生 (被害株率 1～25%)	① 7月下旬の発生量は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
シロイチモジヨトウ	量：やや多い 程度：少発生 (被害株率 1～10%)	① 7月下旬の発生量は未確認で平年並。(±) ② フェロモントラップの誘殺数は平年比多い。(＋) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【その他】

【アブラナ科野菜】 コナガ	量：やや多い	① フェロモントラップの誘殺数は平年並～多い。(±～＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(－)
【野菜類全般】 オオタバコガ	量：多い	① フェロモントラップの誘殺数は平年比多い。(＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
【全般】 ハスモンヨトウ	量：多い	① フェロモントラップの誘殺数は平年比多い。(＋) ② 向こう1か月の気温は平年高いと予想されている。(＋)

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病虫害雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。
②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注2： 「予報の根拠」の、（+）は発生量を増加させる要因、（-）は発生量を減少させる要因、（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：6月1日～8月31日】

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使いましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしましょう。

新潟県病虫害防除所業務課

電話：0258-35-0867

FAX：0258-35-7445

<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/>

【参考】北陸地方 1か月予報（8月3日から9月2日までの天候見通し）

（新潟地方气象台：令和6年8月1日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

- ・ 暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
- ・ 太平洋高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の日照時間は多く、降水量は平年並か少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。
 週別の気温は、1週目は、高い確率80%です
 2週目は、高い確率80%です。
 3～4週目は、高い確率70%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10	10	80
降 水 量	40	40	20
日照時間	20	30	50

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（8月3日～8月9日）	10	10	80
2週目（8月10日～8月16日）	10	10	80
3～4週目（8月17日～8月30日）	10	20	70